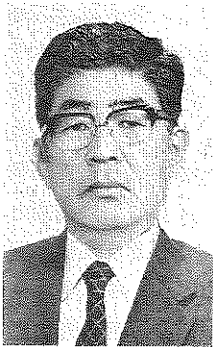


# 栃木県中学校長会報

## 平成元年を迎えて 昭和とともに歩んだ道

栃木県中学校長会副会長 大竹 幸雄



63年余に及ぶ昭和の時代は終わった。新しい平成の世が始まる。例年になく身のひきしまる思いを新たにしている今日の頃である。

不思議なことに時代の変遷に全く関係なく中学校は相変わらず忙しい。昨年にも増して高校進学業務が猛烈な勢いで始まった。どの学校も私立高校の推せん、単願、続いて公立高校と3年の先生方は、夜おそくまで頑張っている。何とか一人の落伍もなく明かるい春を迎えさせてやりたい。

私たち校長のほとんどは、昭和のはじめに生まれ、幼時を世界の経済大恐慌の中に育ち、軍国主義になだれこな戦前の小学校時代を過ごした。

昭和天皇崩御の日新聞全面に載せられた昭和の歴史にさまざまな思いを新たにしたのは、昭和一けた生まれ共通のものであったであろう。

ひるがえって教育の世界でも戦後2度目の大改革が行われようとしている。平成のスタートの年が、新教育指導要領の移行の年になるのも昭和史の最後の大きなひとこまといえよう。

昨年10月には、全日中の大会が本県で行われた。「21世紀をたくましく生きる日本人の育成」を大テーマに、新教育課程、国際理解、生徒指導等、当面課題を中心にさまざまな論議が展開された。本県としても50年に1度の全国的イベントであり、2年間に亘る準備を経て、県内172名の校長あがりの協力を頂き、無事、盛会裡に終了した。はからずも大会事務局長という大役を仰せつかり、何

から何まで初めての事で一時はどうなることかと思ったが何とか責を果たすことができた。これもひとえに諸先生方のご尽力のおかげであり感謝に堪えない。

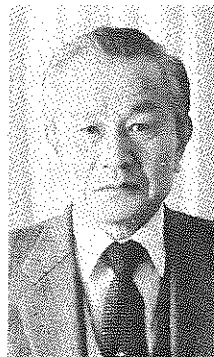
個人の話で恐縮だが、私の誕生は、昭和3年11月、丁度、前天皇の即位式の直前で、それで行幸の一字をつけて命名したと父母から聞かされた。

5. 15. 2. 26両事件、支那事変から大東亜戦争と、戦後、文字通り昭和に生まれ、昭和の終りに退職するのも何かの運命であろうか。

県中学校長会のますますの充実と、新しい平成の平和を祈り、多くの方へ感謝しつつ稿をおわる。

## ふるさと創生と人づくり

栃木県中学校長会副会長 落合 武司



竹下首相の提唱で「ふるさと創生」が叫ばれている。あちこちの町や村で「むら起こし」が始まっている。「ふるさとまつり」や「ふれあいまつり」などが盛んになりつつある。各地にコミュニティセンターなどが建てられ、地域活動が活発化されようとしている。21世紀はいよいよ地方の時代かと期待し楽しみにしている。

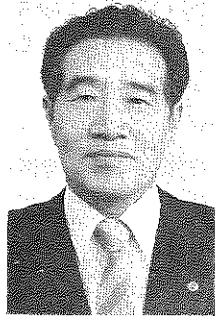
そういえば、1時期よりも過疎化ということが言われなくなったような気がする。数年前までは山間部の過疎化現象は著しいものがあっただようである。そのため、統廃合になった学校も多い。あるいは、このことは逆だったかもしれない。村の唯一の文化施設ともいえる学校がなくなったために、住人たちはよくよく山の中という感に襲われ、

特に若い人たちは、住み慣れた土地を離れていったのかも知れない。祖先が築いてきた土地を発展させるはずの若者たちが、その土地を離れてしまうことは淋しいことである。これを何とかしようとするのが、むら起こしであり、ふるさと創生かと思われる。

今、あちこちの町や村で、各種のイベントや文化活動が盛んに行われるようになってきている。しかし何といっても、むら起こしは、地域性を生かした開発と人づくりにかかっていると考えられる。そこで、学校が担う大きな役割は人づくりである。それも学校だけのものではなく、地域ぐるみの教育活動として推進していかなければならない。学校教育、社会教育、家庭教育が連携して推進されることによって、地域ぐるみの人づくりは実現し、むら起こしにも大きく寄与するのではないかと考える。ふるさと創生が大きく花開き、実を結ぶためには、地域の学校へ寄せる期待がさらに高まるものと思われる。

### 所 感

栃木県中学校長会副会長  
黒磯市立厚崎中学校長 室井 剛



元号も昭和から平成へ、教育改革もいよいよ実施段階へと入り、まさに平成元年は歴史的転換の年といえよう。

21世紀に生きる生徒像、学校像をにらんだ新教育課程へのための、改善のねらいをしっかりと受けとめ、校長は腰を据えて取り組む平成元年度になるだろうと考えられます。この時に臨み私達は校長として研鑽を積み、識見を高める努力に一層の精進を重ねることが肝要と考えられます。

私こと、昭和63年度を振り返り、浅学非才の身ながら、県中学校長会副会長の重責を担うことになり、又全日本中学校長会研究協議会栃木大会

の大会実行副委員長の重責も兼務、力不足ながら会員各位のご指導ご協力によりどうか、この重責を果たすことができたことにたいし衷心より感謝申し上げます。

さて、成功裡に終了しました、第39回全日本中学校長会研究協議会栃木大会が「21世紀を拓く日本人を育成する中学校教育」を大会主題として、昭和63年10月20日、21日の2日間の日程で、宇都宮市文化会館をメイン会場として開催されたことは、今更述べるまでもなく、ご承知の通りであります。私、今考えてみると、本大会は、昭和の時代の最後を飾る大会となり、歴史的に大きな意味をもつ大会になったことを深くかみじめている一人であります。

本大会が成功裡に終わった大きな原動力は、柳田明大会実行委員長を中心に県内会員172名の総力の結集の結果であることは言うまでもありませんが、私がここで一言付記しておきたいことは、本大会の舞台まわしを担当された、宇都宮市内の大会実行委員の方々が休日を返上し、諸準備にあたられ、大変なご苦労があったこととお知らせし、そのご苦労に感謝の意を表します。



### 研究・学校の実践報告

#### 「個人差に応じた学習指導の充実を図るには、どのようにすればよいか。」

文部省指定 中学校教育課程研究校  
国分寺町立国分寺中学校長 若林 一義

#### 1. はじめに

本校は昭和62・63年度の2か年間、文部省より中学校教育課程研究学校として指定を受け、「教育課程一般」ならびに「社会」と「数学」について研究を進めてきた。

ここでは、上記のような研究主題を設定し、研究を推進してきた「教育課程一般」の実践の一端を紹介する。

#### 2. 研究の概要

##### (1) 教科指導

研究主題に基づき、各教科が教科の特性に即してテーマを定め、一斉指導の一般的な特性を生かしながら、個人差にどのように対応するかを求め、学習指導の実践研究を進めた。

##### ① 個の理解

個人差に応じるためには、個人差を正しくとらえることが必要である。

ここでは既習の学習事項が十分に身についているかを、レディネステストやアンケート調査S-P表やレーダーチャートの作成などでとらえ、また、学習を展開しながらの形成的評価や生徒の自己評価・相互評価、指導後における総括的评价など、教科の特性に応じて把握の仕方を工夫し実践した。

##### ② 個人差に応じた指導

###### ア 指導法の工夫

多様な個人差をもった一人一人の生徒の学習を成立させるには、個人差に応じた学習指導を推進しなければならない。次に各教科で実践した個人差に応じた指導法の主なものをあげる。

##### ○教材の開発と提示の工夫

###### ・ワークシートの活用

個々の生徒の能力に応じた指導を容易にする一つの方法として、ワークシートの積極的な活用を行った。また、どの場面で使うのが効果的であるかを指導計画に位置づけた。

##### ○課題及びコース選択学習の導入

###### ・興味・関心・意欲の差に応じた課題選択学習

生徒に意欲的に取り組ませるために、課題選択学習を、教科や単元に即して取り入れた。

###### ・達成度差に応じるコース学習

補充・深化・発展の3コースから自己選択をさせ、基礎・基本の定着と深化・発展を図った。

###### ・ペア学習・グループ学習の工夫

グループ内の生徒が共通の課題に向って協力し、助け合い、教え合って主体的に取り組めるよう、編成の方法、学習場面の設定などを工夫し実践した。

##### イ 個人差に応じた単元指導計画の作成

それぞれの単元の中で、どれだけ個人差に応じた指導が行えるか、どの場面でどんな指導法が効果的かを検討し、指導計画に位置づけた。

##### (2) 補充指導

始業前、放課後等における個人指導や補習、適切な課題を与えることによる家庭学習の指導等、組織的・計画的な補充指導の在り方について実践研究をした。

###### ア、朝の各教科ドリルの実施

###### イ、補充指導の日の設定

###### ウ、放課後の協力学習の日の特設

###### エ、長期休業中における補充指導の実施

##### 3. おわりに

個人差に応じた学習指導の充実を目指し、全校で研究と実践に取り組んだ結果、多くの成果を上げることができた。特に生徒一人一人の実態の把握と個に応じた授業展開により、生徒が生き生き

と学習に取り組むようになった。残された課題も多いので、今後も研究に取り組みたい。

## 生き生きとした体育の学習

一目あてをもち主体的に

取り組む剣道学習一

昭和61～63年度文部省及び宇都宮市教委指定  
格技指導推進校 宇都宮市立城山中学校長

北條 享

### I はじめに

本校は、昭和61～63年度の3か年にわたり、上記より指定を受け、関係各位のご指導のもと、微力ではありますが全校を挙げて研究実践に取り組んでまいりました。

研究に当たっては、本校の教育目標「心身ともに健康な生徒一強く。創造性に富む生徒一賢く。心情豊かな生徒一美しく」の具現化を図るべく地域、学校の実情、生徒の実態をふまえて研究主題を設定し、教科体育における格技（男子）を中核とし、選択体育（男・女）、クラブ活動（男・女）、部活動（男・女）、業間運動（男子）に剣道を取入れ、加えて、この研究の趣旨、格技の持つ特性について全職員の間で共通理解を図り、各教科の指導、道徳、特活等をはじめ、すべての教育活動の実践をとおして、礼節・気力・対人への心くばりの指導に当たり、人間性の育成にも努めてまいりました。

### II 研究実践の概要 — 紙面の都合で省略

### III 研究の成果

格技指導のねらいは、技術面での向上は勿論であるが、心の指導が大切であり、今後、より強く求められるものと考え。そこで、格技を行うことの喜びや楽しさを味わわせることにより、自ら進んで学習に取り組むような指導過程の工夫と、教え合い、支え合う授業展開の中から他を思いやる気持の育成を旨とする研究が進められた。

#### (1) 教科体育

○グループ学習の実践により、協同学習が積極的になり、学習の目あてを達成しようと課題解決に意欲的になってきた。

○個を大切にしている指導過程の設定と、評価の改善により、学習の喜びを味わう態度が生まれてきた。

○用具や施設を大切に、安全に対する関心が高まってきた。

#### (2) 他の教科指導、学級経営

○「大きな声で、はっきり」を合言葉に、あいさつができるようになってきた。

○学ぶ環境を大切にしている態度、実践がみられるようになってきた。

○相手に対する思いやりの心が生まれてきた。

#### (3) 体育的行事

○行事に対する関心が全校的に盛り上がり、自主性、積極性、協調性が増してきた。

○行事に対して、学級としての目標を立てたり、個人としての目あてをもった生徒が多くなってきた。

○勝敗に対する態度が公明正大となり、全力で最後まで努力する姿が目立ち、敗れても一生懸命やったという満足感の味わえる態度が感じられるようになってきた。

#### (4) 部活動、地域との連携

○運動会での男子全員による剣道演技などにより、保護者や地域の人々の理解と関心が高まってきた。

○部活動の運営に関し、積極的な支援をする保護者が多くなってきた。

### IV 今後の課題

教師自身の姿とともに、生徒の学習態度にも意欲がみられるようになってきたが、まだ、緒についたばかりの感が強く、今後の研究課題としてより質の高い格技指導の在り方、効果的に技能を定着させるための指導法の工夫、効果的に技能を定着させるための指導法の工夫、礼節・気力・対人への心くばり、の日常生活への定着化等が挙げられると思う。

終りに、この研究の機会を与えてくださった各関係機関に厚く感謝申し上げますとともに、3か年にわたってご指導くださった指導主事の先生、前校長柿沼敬二先生、研究同人の方々、ご参会いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

## 意欲を高め、実践力を 育てる生徒指導

文部省指定生徒指導総合推進校

南那須町立荒川中学校長 塚原 宣夫

### 1. 学校の概要

本校は全校生徒数365名、教員数18名の小規模校で、かつては純農村地帯であったが、宇都宮市への交通が便利であることから次第に宅地化が進み、都市的傾向に移行しつつある。これに伴って、保護者の子どもに対する期待感も純朴で素直といった農村特有の考え方から、意欲的に物事にあたり、実践する子どもに育ててほしいとする考え方に変容しつつある。

こうした地域や保護者の変容を反映して、従来純朴、素直、他律的傾向にあった生徒の特性は、ここ数年次第に自主的自律的行動をとるようになり、生活規範から逸脱することも少なく、まじめな態度で学習するとともに、生徒活動の面では生徒自ら意欲的に取り組み、実践するようになってきている。

### 2. 研究内容の概要

#### (1) めざす生徒像

本校では、教育目標や生徒の実態、および家庭や地域の要望をふまえるとともに、21世紀に生きる生徒に求められる重要な資質である「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成」を目指して次のようにとらえた。

- ・自ら判断し、実践できる生徒（選択・決定）
- ・意欲的に実践できる生徒（実践・存在）
- ・協力して実践できる生徒（協力・思いやり）

#### (2) 目指す生徒像にせまる手だて

本校の全教育活動を充実させるため、研究組織としては、授業研究部、生徒活動研究部、教育相談研究部、家庭・地域連携部、学年学級研修部を設けて研究を推進してきた。授業研究部では、望ましい学習習慣の形成と学習活動の多様化を中心に、生徒活動研究部では主体的な計画と意欲的な実践により、学校生活に充実感を

持たせる指導法の工夫。教育相談研究部では、自己理解を深め、自己実現を図らせる指導の工夫。家庭・地域連携部では、協力と信頼関係を醸成する指導の工夫。学年学級研修部では、生徒一人一人の存在価値を認めることを中心に研究した。

の工夫。教育相談研究部では、自己理解を深め自己実現を図らせる指導の工夫・家庭・地域連携部では、協力と信頼関係を醸成する指導の工夫。学年学級研修部では、生徒一人一人の存在価値を認めることを中心に研究した。

また、各研究部を貫く基本的な考え方として①選択・決定、②実践・存在、③協力・思いやりを指導の3視点とし、望ましい人間関係を基盤とし、選択、決定、実践、評価というプロセスを通して自己教育力を育て、一人一人の生徒に存在感を味わわせれば、意欲的に物事に取り組み、実践力が身に付き、目指す生徒像にせまることができると考えて実践してきた。

### 3. 研究の成果

- (1) 学習形態の工夫によって、自ら課題を見出す態度や、協力して解決していく態度が身につくとともに、互いに学びあい励ましあう学習活動の雰囲気できた。
- (2) わかりやすい授業展開とともに、指導の3視点を指導過程に設定したことによって、学習に意欲的に取り組む態度が身に付いてきた。
- (3) 生徒自らが計画し、実践・反省していく場面をより多く取り入れたことにより、生徒一人一人が自分の役割を自覚し、協力して目的達成のために励ましあうことになり、集団の一員としての自覚も高まり、充実感をもつようになった。
- (4) 指導連絡票を活用することによって、生徒の小さな善行が認められるようになり、教師と生徒との心の交流を深めることができた。
- (5) 校報あらかわ・保健だよりを通して、学校の様子や学年の様子を保護者に理解してもらうことができ、家庭の教育的関心が高まった。
- (6) 親子、教師による諸行事や活動によって、地域ぐるみで生徒の健全育成に取り組むようになった。

### 人権意識の高揚を図り、偏見と差別を許さない実践力のある生徒の育成

#### 一個と集団の好ましい人間関係づくりを中核として一

栃木県教育委員会指定（同和教育）  
日光市立日光中学校長 阿久津久太

#### 1. 研究の方針

- (1) 地域及び生徒の実態を踏まえ、課題を明らかにして全職員共通理解のもとに推進を図る。
- (2) 研究分野を生徒の活動、社会科、道徳及び学級指導とし相互の関連を図りながら進める。
- (3) 生徒理解を深め、生徒一人一人の自己実現を図れるように援助指導をする。
- (4) 保護者への啓発活動を進め、学校同和教育の理解と協力を求める。
- (5) 教師自ら同和問題、同和教育に対する理解と認識を高める研修を積みその資質を高める。

#### 2. 研究の内容

- (1) 指標としての「ごあい」の設定  
生徒、保護者の実態を踏まえ、生徒個々の目指す指標として「ごあい」①認め合う②助け合う③学び合う④働き合う⑤高め合う、を設定した。生徒の活動を重点に社会科、道徳、学級指導の実践の場を通し、「ごあいの推進」を掲げて、好ましい人間関係、望ましい集団づくりをすることによって偏見と差別を解消する調和のとれた生徒を育成する。
- (2) 育てたい能力・態度  
ア. 豊かな心情  
ア) 偏見や差別に対する悲しみ、苦しみ、怒りに共感でき、思いやりのある態度がとれる。  
イ) 他人のよさを認め、互いに助け励まし合って生活しようとする思いやりのある心で生活できる。  
イ. 正しい判断力  
ア) 人権に対する正しい認識と判断のもとに、差別の不合理を科学的、合理的に見極め、そ

れを許さない態度がとれる。

- (イ) 善悪に対し、正しい見方・考え方ができ、人を差別しないで仲良く協力し合う態度がとれる。
- ウ. 確かな実践力  
ア) 仲間を大切にし、生活の中の偏見や差別を消して解消しようとする強い意志をもち実践的態度がとれる。  
イ) 物事をみんなで考え、思いやり支え合いながら共に伸びる集団づくりができる。
- (3) 研究教科等の課題  
ア. 生徒の活動：人権を大切にする活動を通して「確かな実践力」を育てる。  
イ. 社会科：基本的人権に関する「正しい判断力」を育てる。  
ウ. 道徳：人権尊重の精神を培う「豊かな心情」を育てる。  
エ. 学級指導：望ましい人間関係を培う「確かな実践力」を育てる。
- (4) 好ましい人間関係づくり  
ア. 指導の3ステップ  
ア) 気づく（問題の意識化）  
生活の中にある偏見と差別に気づく。  
イ) 学ぶ（実践への意欲化）  
偏見や差別を自分自身の問題として筋道を立てて考えられる。  
ウ) とりくむ（実践化）  
偏見と差別に対し、みんなが主体的に正しい判断をして行動する。  
イ. 配慮を要する生徒の援助指導  
弱い立場におかれがちな生徒に対し、その実態を的確に把握し、一人一人の人権を最大限に尊重して、自己実現を図れるように、学級集団の中で認められ、助け合いながら生き生きと生活できるような好ましい人間関係をつくる。
- 3. 生徒の変容  
(1) 生徒会中心に人権意識の高揚と態度化を図ろうとする活動がみられるようになってきた。  
(2) 偏見や差別的言動に敏感となり、友だちへの思いやりがみられるようになってきた。

### 海外研修視察記

#### アメリカの教育事情

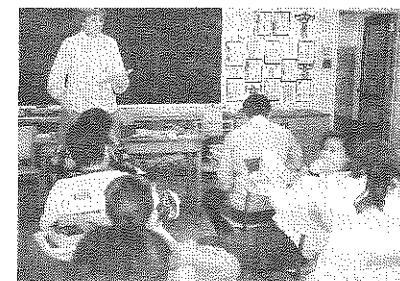
文部省教員海外派遣

栗山村立西川中学校長 森田 洋

昭和63年9月26日から10月11日までの16日間、文部省海外教育事情視察92団の一員として、アメリカを訪問する機会を得ました。時折しも天皇陛下の病状思わしくなく、また、隣国韓国では、オリンピックの開催中でした。栃木県から選ばれた25人のうち私だけが中学校長であり、あとは若い中堅の立派な先生たちでした。訪問先は、シアトル、シカゴ、アトランタ、ニューヨーク、ロスアンゼルスでした。その中で南部ジョージア州アトランタの近くにあるラグランジュと、北部シカゴの近くにあるエバンストンの2つの市の小中高を9校視察しました。今回は、特に2つの中学校を訪問した印象について述べてみたいと思います。

●南部ジョージア州にあるウエストサイド・ガールズ・ジュニアハイスクール

美しい芝生の中に学校があり、日本のような高層ではなく二階建てであった。芝生には、リスがあちこちで遊んでいた。この中学校は女子のみの中学校で女性校長である。340人の学生が在籍し、



7年生と8年生である。生徒たちの服装は自由で口紅やイヤリングをつけている生徒も数多くみられ、校舎内の整理整頓はきちんとしており、自由にそして楽しく生活しているようすがうかがえた。また日本と変ったところでは中学校ではあるが、同市内の小中学生の中から学業成績、行動等のきわめて優秀な者を曜日を決めて同校に進学させ、小グループによる英才教育を行うマグネットスクールというクラスがあった。また校内でも、社、理、数、国が能力別に編成されており、個別指導の充実を図っている。

#### ●シカゴ近郊にあるウエルメット中学校

シカゴの北西部にエバンストンという市がありその中心にウエルメット中学校がある。ミシガン湖に接し自然の美が市街によく調和している。生徒数820人の大規模で男女共学である。6年生、7年生、8年生が殆んどスクールバスで通学している。シャルマン校長は47才で風格があり、服装のセンスが都会的でどこかの社長か重役のような感じを受けた。また、ユーモアがあり気くばりが行きとどき教頭や先生方とのコミュニケーションが極めてよい。

小学校5年を卒業するとこの中学校で3年間学ぶわけだが、教育委員会は、幼小中高の教育を生涯教育的な組織の上に個別指導の徹底や、家庭との連携がよくコーディネートされており、特に小学校教育では、基礎基本が徹底的に指導され、中学校では、先生と生徒が楽しみながら授業している姿が目についた。施設設備については、使いやすさを考慮し、よく整備されており校舎全体がグリーンである。各教室ともクーラーや暖房の設備がある。ウエルメット中学校での特色はコンピューター26台をそろえたディスカバリーセンターである。ジョージア州の中学校にくらべてウエルメット中学校は白人ばかりだった。人種差別はないと思うが、まだ根づよく残っていることも感じとった。庭園にはリスが遊び、化粧したり、イヤリングをつけたり、つめをそめたりしている生徒、1時間の授業中、横の生徒の方に足をのばしている生徒、先生が机の上に腰をおろして授業や採点をしたり、日本ではあまり見受けられない光景があったが、自由主義社会の中での学校にあって、型よりも内容を重視しているアメリカ教育の巨大さ、寛大さを痛感した。レセプションパーティの様子、次の日の新聞の第一面に「東と西が学校で会う」という大見出しで写真4枚入りで報道されたことは、アメリカが日本の教育に如何に関心を払っているかを意味していた。若くても風格のある47才の校長の堂々とした心から温まる歓迎ぶりは一生忘れ得ないことだろう。

地区だより

教育は人なり日々新たに

(安佐地区)

安佐地区中学校長会の主な研修活動と内容について列挙すると概ね次のようである。

1. 安佐中学校長研修会

本年度の研修は、特に全日中栃木大会において本地区が担当する分科会のテーマとの関連を図った。研究題を「教職員の資質向上と指導力を高めるための職員指導のあり方」として、年間8回の研修を進めた。主な研修題目を挙げると、○望ましい進路指導のあり方、○特別活動を通じた生徒指導、○学ぶ力を育てる学習指導、○選択教科の設定と指導など。上記研修題目により提案、研究協議が活発に行われた。その他、教育講演会や実情調査等を実施して、教職員の資質向上と指導力を高める研修を進めている。

2. 安足合同中学校長研修会

安佐中学校長会は、佐野市6校、安蘇郡田沼町2校、葛生町2校一市二町10校から組織されている。年に1～2回であるが足利市の中学校長会11校と合同研修会を実施している。本年は7月9日(土)葛生町文化センターで開催された。テーマは、「特色ある学校経営について」各校からの発表により、それぞれの学校が特色ある学校づくりのために努力されている姿が理解できた。なお、研修会終了後は懇親会を開き親睦を図っている。

3. 安佐中学校長会県外優良学校経営実情調査

本年は12月1日、2日(一泊二日)により、静岡県焼津市立大村中学校を実情調査した。当中学校は、地域ぐるみの生徒指導を推進しており、環境浄化モデル地区として青少年を守る浄化活動を推進している。特に父母との地域懇談会や父親を対象とした「父親を語る会」など、地域と父母の協力連携する中で青少年の健全育成に努めている。

上記の各種研修に参加して、資質の向上は校長自らの研修と指導力にあることを痛感する。

可能性の開発をめざす  
中学校教育の推進

(塩谷地区)

1. 塩谷地区校長会の構成

塩谷地区校長会は、矢板市立中学校3校と塩谷郡4町(塩谷、氏家、高根沢、喜連川)の中学校7校の1市4町10校で構成されている。

2. 研修活動

研修活動は年7回実施しており、研修主題を「21世紀を拓く日本人を育成する中学校教育」とし、副題として「可能性の開発をめざす中学校教育の推進」とした。今年度は、同一研修主題による継続研修の第3年次にあたる。

特に下記事項について継続研修を進めた。

- (1) 活性化を図る調査研究
- (2) 新教育課程編成についての研究
- (3) 「やる気」を起こす教科指導の充実
- (4) 一人一人に充実感を持たせる生徒指導

3. 対策活動

地区内の中学校教育の振興を図るため、次の諸対策活動を進めた。

- (1) 教育諸条件の整備
- (2) 教職員の勤務意欲の高揚
- (3) 教育関係機関・諸団体との連携
- (4) 教育振興懇談会の開催

4. 活動計画

- 4月 総会、運営組織編成、教育懇談会
- 5月 教科指導の充実研究、進路指導対策研究
- 7月 中学校教育の諸問題について研究協議
- 9月 生徒指導の充実研究

中学校教育の諸問題について研究協議

11月 県外教育事情調査(岩手県)

1月 新教育課程編成についての研究

2月 学校経営上の諸問題

研修・対策活動の反省と次年度の計画

5. 中教研との連携

中教研活動の学校経営部会に全校長が参加し、特色ある学校経営のあり方を研究している。

全日中から関ブロへ

(足利地区)

1. 足利地区校長会の構成

足利市立中学校 11校 総員 11名

2. 研修活動

7月：昭和60～62年度研究集録「21世紀を拓く日本人を育成する中学校教育」に関する研修

8月：第38回全日中栃木大会に関する研修  
8分科会の各テーマの内容についての事前研修

10月：県外教育実情調査  
山梨県勝沼町立勝沼中学校  
(奉仕等体験学習研究推進校)

12月：小中合同同和教育校長研修会  
テーマ「学校として父母への啓発をどう進めるか」

「選択教科履習の拡大にともなう教育課程の編成」に関する研修

1月：小中高校長研修会  
講演 「カウンセリングマインドと学校経営」

講師 足利工業大学教授 須田陽先生  
※足利市教委では、昭和63年より、須田陽先生をスーパーバイザーとして委嘱

平成元年度関ブロ提案の資料内容の検討 (第1回)

2月：平成元年度関ブロ提案の資料内容の検討 (第2回)

小中校長合同研修会  
講演 「生涯学習を考える」  
講師 国立科学博物館長 諸澤正道先生

3. 関ブロ長野大会へ向けて

平成元年度関ブロ長野大会において、足利地区が第2分科会「豊かな学校生活を目指す教育諸条件の整備」の主題を受けて、「物的条件を中心とした改善と充実」について提案。

年々の研修の積み重ねを大切に

(芳賀地区)

芳賀郡市は県の東南にあり、茨城県に接し、山地、平地、工業地帯、市街地がバランスよく配置され、農村のよさと都市化のよさが調和した地区である。

芳賀郡市中学校長会は1市5町の17の中学校長で構成され、連絡報告、研修を効果的に行い、年々成果を積み重ねている。1年間の研修会の回数は7回、県、関地区、全日中の方針をふまえ、芳賀地区の実態に即してテーマを設定し、真剣に解明に取り組んでいる。今までのテーマは次のとおりである。

(昭和60年度)  
学校経営の活性化の原動力・自己教育力の育成  
・家庭社会との連携

(昭和61年度)  
学校経営の活性化と校長のリーダーシップ

(昭和62年度)  
学校・家庭・地域の連携を重視した学校経営

(昭和63年度)  
豊かな心を育てる学校教育における校長の指導性  
学校経営の活性化や校長のリーダーシップは、現状においては最も重要な課題であり、各校での実践を持ち寄り、郡市全員が班に分かれて話し合い深めている。

今年度は、17校の中、6校が新会員という変化の激しい年であっただけに、今までの積み重ねや、研修の進め方を再確認することが必要であった。その上で、新人の意見を取り入れ、改善するように努力した。

連絡報告では、県や関地区、全日中の情報のほか、各校の成果、スポーツの成績、生徒指導上の問題点などを交換し合い、校長会としての機能を十分に生かしている。

## 研修活動の概要

(南那須地区)

昭和63年度は、転入校長2名、8中学校8名で中学校長会発足、組織は、会長北條光二(境中)、副会長小堀功(下江川中)、書記・会計林昭(七合中)、研修主題は、「21世紀を拓く日本人を育成する中学校教育」、特に、今年度は、校則(生徒心得)の見なおし—その問題点と望ましいあり方について—研修を進めるとともに、並行して、研究学校による研究推進中の、荒川中「生徒指導」、馬頭東中「格技指導」について研究協力、研修を進めることにした。

◇第1回 4月4日(月) 南那須教育センター

総会ならびに研修会、事業計画、予算、組織づくり等

◇第2回 6月24日(金) 荒川中

教科指導における生徒指導について、授業参観と、塚原校長、研究主任よりの研究内容、実践の説明、ならびに校則(生徒心得)の見なおしについて研究協議、次回研修の課題、分担等について

◇第3回 11月4日(金)馬頭東中

格技指導の推進について、授業参観、研究主任より、研究の構想、指導の実践について説明を受け研修、その後校則の実態と問題点、見なおしの視点(体制、校長の指導性等)について、各自の資料に基づいて研究協議

◇第4回 1月14日(土) 烏山町就業センター

郡小・中学校長合同研修会において、林校長(七合中)より研究のまとめの発表を行った。

その他、研修会においては、当面する諸問題として、一つは、全日中栃木大会の成功へ向けての協力、確認、新教育課程の研修及び学校経営、必要な準備等について随時研究協議を行っている。

## 目的意識・進路選択力を 育てる進路指導

(宇河地区)

### 1. はじめに

本地区は3回の研修会を実施したが、ここではその中から進路指導に関する研修(古里中学校の研究)を報告させていただくことにする。

### 2. 研究主題

生徒に将来の進路を意識的に持たせ、能力・適性等に応じた進路選択力を育てる進路指導—進路希望・目的意識の育成を重視した学級指導における進路学習の活性化を目指して—

### 3. 研究主題設定の理由

生徒一人一人の能力・適性等を的確に把握して中学校3か年を通じて計画的、組織的に進路指導を行いながら、進路選択力を育てる方策を明らかにしようとして本主題を設定した。

### 4. 研究のねらい—進路指導で期待する生徒像—

- (1)自ら進んで学習に励み、粘り強く積極的に問題解決に取り組む生徒。
- (2)目的意識を持ち、自己を理解し、自分の道をたくましく切り開く生徒。
- (3)自己の能力・適性等を把握し、伸ばし、それに応じた進路選択力を培う生徒。

### 5. 研究実践の概要

- (1) 学級指導部 ①学級指導における進路学習年間指導計画の在り方。②学級指導における進路学習の指導の在り方。
- (2) 進路相談部 ①生徒一人一人の進路意識を高め、自己理解を深める進路相談の在り方。②継続的・計画的に実践できる進路相談計画。
- (3) 生徒啓発部 ①生徒一人一人の自己啓発が助長され、個が生きる啓発経験のさせ方。②学校行事等に啓発経験を複合させる行事の持ち方。
- (4) 情報資料部 ①諸検査、諸調査の仕方と活用。②情報資料の収集・提供の在り方。
- (5) PTA研修部 ①家庭で発達段階に応じて話し合える資料の提供。②保護者への啓発活動。

古里中学校はこの研究で大きな成果を上げた。